

---

# GATE KEEPER

ちやすけ丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

G A T E   K E E P E R

### 【Nコード】

N 4 5 3 4 Y

### 【作者名】

ちゃすけ丸

### 【あらすじ】

運命に翻弄される少女が真実を求めて旅をする物語。

出会いと別れを繰り返し、行き着く先で彼女が得るものは……

素人が書いたファンタジー物語なので、暖かく寛大な御心で、お手透きな際に読んで下されば幸いです。

「mixiアプリ」携帯小説から移設作業中

## 序

『ゲートキーパー』

大小複数の国家から成るこの大陸には、楽園への扉を開き人々を導く力を持った者が数百年に一度生まれると言い伝えがある。

しかし、その出生には謎が多く、楽園へ行った者は誰一人として戻ってこなかったことから次第に人々の記憶から忘れ去られ、今では伝説となっていた。

そのような中、大陸一の領土を誇る国に『ゲートキーパー』の痣を持つ女の子が生まれることになる。

神に愛されし国ノヴィア。

かつてこの国に『ゲートキーパー』が生まれたことは、ない。

(0)

「大丈夫、怖くないからね」

少女は抱えていた野兎に優しく話しかける。

「酷い傷。痛かったでしょ？ 直ぐに治してあげるから」

そう言いながら、そっと手の平を傷口にかざして意識を集中させる。

すると、わずかな静寂の間に兎の傷は塞がり、傷跡や白い毛を染めた血まで見えなくなった。

「これでもう大丈夫。早くお家にお帰り。もう怪我しちゃ駄目だよ！」

そっと地面に放すと、勢い良く飛び跳ね森へ帰っていく。

そのうしろ姿を少女はにっこり笑って見送った。

肩までの緩くウェーブがかかった黒髪と、真っ白なワンピース姿で微笑む姿を初めて見た者は、きっと天使と見間違えてしまうだろう。

そんな優しく愛らしい笑顔だ。

突然、彼女は何かを思い出したのか、慌てて戸口へと駆け出した。

「デイド」

彼女の向かった先には、一人の青年が立っていた。

整った顔立ち、長く波打つ金髪。

その姿は女性と見間違う程美しい。

少女がまだあどけない小天使だとしたら、彼は高位の大天使とでも言うべきだろうか。

「サリユ！」

少女は彼を見るなり、何のためらいもなくその胸に飛び込んだ。  
った。

「デイド、また動物の怪我を治してあげていたのかい？」

「うん！」

「そうか、デイドは優しいね」

そう言うと少女の頭を優しく撫でる。

「でもそろそろ行くわ。」

デイドも今日から魔術士の卵だ。初日から遅刻じゃ笑われてしまう  
からね

「……」  
「じめんなさい」

「さあ、これを羽織って。 迎えの馬車はもう着いているんだ。荷物を積み込んだら早速王都に向かおう」

「ねえ、サリュ。 王都の魔術学校ってどんなところ？」

「魔術学校は、素質を持つ者たちが集まり、魔法を一からきちんと勉強する所だよ。

各地にいっぱいあるけど、王都の学校に通う子たちは皆、宮廷魔術師を目指しているから特に熱心だね。

デイドもその子たちと一緒に生活しながら学んだよ。

「……不安かい？」

「うん、ちょっとだけ」

「心配することはないよ、僕も近くの王宮で働いているからね」

「うん」

「これで、良しっつ」

サリュエルはデイドに羽織らせた外套のボタンを掛け終わると、彼女の手を引いて歩きだした。

家の表側に回ると直ぐに馬車が見える。

「ほら、馬の隣に居るおじいさんが今日私たちを王都まで案内してくれる方だよ。しっかりと挨拶してね」

「もう！そんなに子ども扱いしないで」

白髪の老人は、サリュエルたちを見つけると静かに頭を下げた。

「サリュエル様。荷物は全部積み込みましたんで、いつでも出発できます」

「そうか、ありがとう」

「おじいさん、はじめまして。デイド・アーサーです。王都までよろしく願います」

ぺこりと頭を下げるデイドを見て、老人は顔のしわを一層深くして微笑んだ。

「これは可愛らしいお嬢さんだ。」

「さあ、お嬢さんも早くわし自慢の馬車に乗ってくださいね」

老人は二人が馬車に乗り込むのを見届けると馬の鬣を撫でてから、ゆっくりと馬車に乗り込んだ。

「サリエル様、出発してもよろしいですか？」

「ああ、出してくれ」

「かしこまりました」

手綱が小さく打たれると馬は一鳴きしてゆっくりと歩きだす。

ガタゴトと時折車輪が小石に乗り上げる不規則なリズムが妙に心地良い。

デイドは馬車の揺れを楽しみながら次第に遠ざかる我が家を見つめていた。

少女の名はデイド・アーサー。

御歳14歳。

神の加護を受けた国に初めて生まれた『ゲートキーパー』である。

少女は育ての親、魔術師サリュエルの愛情を一身に受け、今日まで何不自由なく暮らしてきた。

そんな彼女の幸福な日々が既に崩壊へと歩み始めていることが想像できただろうか。

誰も知らない「運命」への旅路はこのとき始まったのである。

(1)

「行って来ます、おばさま！」

デイドは、いつもより明るい声で給仕の女性に挨拶をして寮を出た。

笑顔になるのも無理は無い、あと一週間で月に一度の休校日がやってくるのだ。

趣のある町並みや、馬車で大通りを通過した際、視界に飛び込んできた華やかな店舗は忘れられない。

何よりもサリュエルに会えることが嬉しくてたまらなかった。

王都の魔術学校は寮制のため、通いだしてからは挨拶すら交わせていない。

初日の別れ際、次に会うのは休校日だと約束したのが最後の会話だ。

休校日には、二人で街へ出て買い物をして午後にはお茶を飲みな

がら学校の話をとくさん聞いてもらおう。

そんなことを考えながら、デイドは校舎へと向かった。

静かな朝も、講堂前の廊下では各寮から出て来た生徒たちの声で賑わっている。

デイドは講堂の入り口を通過したところで、後ろからドンツと突かれてバランスを崩した。

呆気にとられて振り返ると、そこには女子学生が立っている。

知らない子だ。

年齢はデイドよりもひとつふたつ上だろうか。

混じり気のない金に波を打つ長髪は一瞬サリュエルを彷彿させるが、上質で華やかな服装と膨らんだ胸元を見れば、目の前にいるのは間違いなく女性だと解る。

ただ、その女子学生の視線は確実にデイドを敵視していた。

「下賤な南方人、お退きなさい！」

案の定、口を開いての第一声はこれだ。

「黒髪なんて、ホント野蛮」

驚いて訳の解らないまま道を譲ると、彼女はすれ違い様にもう一声浴びせてから講堂の奥へと歩いていった。

しばらくその場に立ち尽くしていると、今度は別の女の子に声をかけられた。

「デイドちゃん、おはよ！」

聞き覚えのある軽快な声。

学校に入って最初に知り合った友達、フォルナだ。

ひとつ年上の彼女は面倒見が良く、入学したばかりのデイドに対していろいろとアドバイスをしてくれた。

いつも笑顔を絶やさず人懐っこい性格で、すぐに打ち解けることができた。

もちろん彼女は突き飛ばしたりしない。

デイドはくるりと振り返って挨拶を返す。

「デイドちゃんってば、また厄介な奴に目をつけられちゃったね」

「え？」

「ほら今の女よ、シエリル・ランフォード！ 知らないの？」

「うん、知らない」

「代々宮廷魔術師を勤めるランフォード家の一人娘でさ。ちょっと金持ちで能力があるからってお高くとまっちゃってんの！」

「へえ、そうなんだ」

「んも〜気のない返事ね！」

「だって、ホントに知らないんだもん。そのシエリルが、どうして私なんか？」

「あら、そつきますか」

フォルナはデイドに向かって人差し指を立てる。

「良い？ デイドちゃんは入学早々中級クラスにクラス分けされたのよ！ そんな特例いまままでに一度も無いんだから！」

「そんなこと私に言われても困るよ。決めたの私じゃないし」

フォルナのオーバーな身振り手振りに対して、落ち着き払っているデイドの返事が両極端で、周囲にいた生徒たちからはかすかな笑い声が聞こえてくる。

「と・に・か・く！ 今やデイドちゃんは校内一の有名人！ 常に一番でないと気が済まない相手にとっては黙って見過ごせない存在つてことー！」

「……そういつものなのかしら」

「そういつものなの！」

教室の入り口まで二人の会話は続いていたが、非常にきつい女性の声によって遮られた。

その声に、ピンと背筋が伸びる。

恐る恐る振り返ると、細面に三角眼鏡をかけ、長い髪を後頭部で綺麗に束ねた女性が立っていた。

清楚なドレスを身にまとった彼女は、二人が所属する中級クラスの担任だった。

「ミス・パティ！ その下品な言葉使用は何ですか！ 宮廷魔術師を目指す者が、そのような口の利き方で良いと思っているのですか！？ それにミス・アーサー！ あなたもです！ いつまで、ここに立っているおつもりですか！ はやく中に入りなさい！ 直ぐに講義は始まるのですよ！」

「はい、先生！」

「ごめんなさい」

流石のフォルナも担任から降り注ぐ雷には応えたのか、しゅんと  
なつて頭を下げた。

(2)

魔法学校では午前に魔法に関する知識を学び、午後からは実技の実習を受ける。

朝早くから夕方までびっしりと講義を受けた後は、どっさり出される宿題を寮でこなす。

宮廷魔術師になるためには、どれも欠かすことの出来ない大切なことだ。

だが、勉強はまだいい。

競争の激しい学校での人間関係はそれ以上に難しい。

特にデイドにとっては。

田舎の森で静かに暮らしていたデイドにとって、今朝の一件は初めての経験だった。

下賤だといわれたことは衝撃と言ってもいい。

黒髪って野蛮なの？

心に何か引つかかるものがあるが、それが何なのかまだ良くわからない。

「まあ、あいつのことなんて気にしなくてもいいんじゃない？」

食堂でフォルナは、心を見透かしたように話しかけてくる。

「え？」

「シェリルのこと考えてたんでしょ？ 顔に出てるよ」

「……………出てるかな」

デイドは反射的に顔を抑える。

「出てる、出てる！ それに加えて自分の髪の色を気にしてる。」

「そつでしょ？」

「なっ…／＼／＼！ 何で解るの!？」

「ずばり言い当てられて恥ずかしくなる。

「私ってそついうこと読み取るの得意なんだよね」

「え？ 何？ それって新しい魔法なの？」

「まさか！ 女の勘よ」

「……おんなのかん??」

「そつ、女の勘！ デイドちゃんにはまだちょっと解らないかな」

「なっ…！ 私とフォルナは一歳しか違わないわ！」

珍しく頬を膨らますデイドを見て、フォルナは声をあげて笑った。

「そうそう、デイドちゃんはそういう顔の方が可愛くて似合ってるわ！ まあ確かに、黒髪は王都では珍しい色だけど、気にすることないわよ。神女のイオ様みたいでとっても素敵よ。だからほら、元気出して午後の実習に行こ！ 昼休み終わっちゃうよ！」

何処か、はぐらかされた感じはするが、屈託のないフォルナの笑顔を見ると自然と笑みを返してしまう。

デイドは食堂を発つと、彼女と一緒に校内の実技練習場へと向かった。

「ところでデイドちゃん。今度の休校日はどうするの？ 何か予定ある？」

「今度の休校日はサリュと街へ出かけてみようと思うの」

「サリュ？ ……彼氏？」

「ちっ／＼／＼違っわよ！ サリュエル・ニーズ！ 私の育ての親で…」

と、デイドが言葉を切る。

フォルナの様子がどうも変だ。

どうしたのかと彼女の顔を覗き込むと、突然彼女は目の色を変えて詰め寄ってきた。

「もしかして、あの容姿端麗・才色兼備の宮廷魔術師サリュエル様！？」

「……男性に対してその言葉は使わないわ」

「そんなこと今はどうでも良いの！ で、どうなの、サリュエル様なの！？」

「サリュは王宮で働いていると言っていたし、たぶんそうだと思う」

その言葉を聞いてフォルナはいよいよ舞い上がった。

「本当なのね！？ 育ての親って何で黙ってたのよ」 ねえ、デイド、その日は二人で王宮に行かない？

月に一度の休校日は王宮の解放日でもあるの！ そこでサリュエル様に会わせて！ 私、サリュエル様の大ファンなのよ」

フォルナはそう言いながら、デイドの手を握り上下にブンブン振り回す。

「フォルナ、手、痛い！」

「ねえ、お願い！」

「わ、解ったから、早く放して」

「やったー デイド約束したからね！ 絶対よ！」

「そんなに心配しなくても大丈夫だから」

デイドは痛みの残る手をさすりながら、ため息混じりにつぶやいた。

「その日は三人で街でお買い物して、お茶をして…… わあ！  
なんて最高のの！ ああ、そうだ！ 何を着ていこうかな。 サリ  
ユエル様にお見せできるような服を見繕わなきゃ！」

「フォルナ？ 練習場はそっちなじゃないわ」

デイドが注意を促すも、浮かれた彼女にはまったく届いていない。

しかたなく彼女を置き去りにして先に練習場に向かったデイドは、  
数分後遅れてやってきたフォルナが講師にこっぴどく叱られる場面  
を見ることとなる。

(3)

静寂の続いていた王宮の廊下にひとつの足音が響いた。

「王女！」

穏やかな昼下がりの庭を眺めていたサリュエルは来訪者の手をとると、その甲に優しくキスをする。

「王の御加減はいかがですか？」

「……あまり芳しくは」

伏し目がちに答える彼女を気遣うように彼は優しく微笑みかけた。

ジェノウィーズ・ハーツ・ノヴィア。

現国王のたった一人の娘であり、病に伏せる王に代わって国を治める齡28歳の王女。

長い金の髪を後頭部でひとつに結び凜とした美しさをもつ彼女は、しかしながら今サリュエルに弱々しく微笑みを返している。

「この国はどうなってしまうのでしょうか…… 父王が倒れられ、わが国への侵略を目論む国は確実に増えています。それなのに神の言葉を聞く唯一の神女ヒテラは不在のまま。 神は…… 神は自ら築かれたこの国を見放されたのでしょうか？ 私はこの国の王女として民を守って行けるのでしょうか」

「王女……」

「私には、とても……」

「心配はいりませんよ。 我々臣下が手を尽くしていますし、神もきっと何か考えがおりなのでしょう。 神女イオの失踪も、もしかしたらトラ神のお考えの内かもしれない」

尚も不安げな表情の彼女にサリュエルは励ますように背に手をまわした。

「今、軍を強化するために才能ある兵を募っています。 まだお触

れを出して間もないが、既に国中からかなりの人数が集まっているようです。

……それとデイドをご覧になりましたか？」

「デイド？ ……貴方が育てたという伝説の『ゲートキーパー』ですね。まだ見てはいないけれど、イオに良く似た黒髪の少女だと聞きました」

王女はそこで一度言葉を切ってからサリュエルに問い質した。

「その子がイオの娘だと言つのですね？」

「いえ、ハッキリとは」

「でも、貴方は子を預けた女性を見たのでしょうか？」

「暗闇でしたし、黒いフードを被っていましたから、はっきりと顔までは見ていないのです」

なにしろ突然のことでしたから、と苦笑する。

「そうですか」

サリュエルの言葉に、王女は小さくため息をもらした。

「ですが、この国では黒髪は珍しい。容姿が似ているとなるとその可能性は高いかと」

「ええ、確かにそうですね。でも、それならば……」

父親は？

言いかけて王女は口を噤んだ。

これは軽々しく口にできる話題ではない。

婚姻が許されない神女が禁忌を犯したのであれば、罰が下され次の神女が選ばれてしかるべきである。それが、なされていないとなると……

デイドは神の子かもしれない。

彼女は心の中で呟いた。

「どうしました？ 王女」

サリュエルの声に、王女は顔を上げた。

「いえ、なんでもありません」

「トラ神の加護によって平和を保ってきたこの国に、今必要なのは神女です。我々には神の言葉が必要です。 なんとしても、イオを探さねばならない。『ゲートキーパー』はあらゆる能力に長けているという。イオの娘であるならば、なおさら彼女の行方が解るかもしれない。ただ……」

「ただ……？」

「あの子はまだ、本来の力に目覚めてはいない。 直ぐにとはいか

ないでしょうが、それは私がなんとかしてみましよう」

「わかりました。この件はデイドを良く知る貴方に任せます」

サリュエルは、王女の手に再び軽くキスをするとお辞儀をしてから歩き始めた。

「……少々荒療治だが」

そう呟いた彼の言葉は、風に揺れる木々の音にかき消され、王女はもちろん誰の耳にも入ることはなかった。

(4)

月に一度の王宮の解放日。

大勢の人たちが自分の前を笑顔で通過していく。  
すれ違う人たちと視線を合わせることはないが、時折哀れむような眼差しを感じる。

「フォルナ、まだかな」

目を伏せ思わずため息をつくとうようやく待望の声が届いた。

「デイドちゃん！ デイドちゃん！ デイ・ド・ちゃん！」

(やめてフォルナ……)

独りで待つのは決まりが悪かったが、大勢の前で名前を連呼され

るのはもつと恥ずかしい。

短い言葉でフォルナを呼ぶと、彼女もすぐにデイドの姿を捉えた。

大きく手を振った後、人ごみを器用に掻き分けながら目の前まで駆けてくる。

「お待たせ、デイドちゃん！」

「もう！ フォルナ、何やってたの！ すっごい遅刻！」

「ごめんごめん、服がなかなか決まらなくてさ」

彼女の言葉に服へと視線を移したデイドは思わず顔が引きつった。

「フ、フリフリ……」

「ね、このワンピースどゆっ？」

(どろっと……)

フォルナはスカートの裾を摘んで可愛らしくポーズを決める。

(恥ずかしいから人前ではやめて!)

喉から飛び出しそうだった言葉を必死にこらえ、デイドは彼女を先へ促した。

歩き始めてすぐフォルナは思い出したように声を上げる。

「ねえ、サリエル様とはどこで待ち合わせているの?」

「待ち合わせなんかしないわよ? これから取り次いでもらうんだもの」

「え!?!? これからって…… 大丈夫なの!?!? 結局会えなかった

なんて才チ、私承知しないわよ！」

「大丈夫よ、今度会うのは休校日だって約束したものの。サリュは嘘をつかないわ」

「そうよね……サリュエル様だものね！」

(5)

デイドたちは門を潜り抜け、長い階段を上り、王宮へと続く庭へと到達した。

辺りは開放日とあって、一般人や生徒達の姿があちこちに見える。

と、

デイドが突然足を止めた。

「どうかした？」

「……フォルナ、この像は？」

庭のちょうど真ん中。

デイドの目の前には立派な像が立っていた。

「え？ トラ神だけど……まさかデイドちゃん知らないの？」

「……………うん」

「うっそ！ この国に居てトラ神を知らないとか、ありえないんですけど」

「そんなこと言ったって、知らないものは知らないし」

「ふう。 ホントに困った子なんだから。 ……良いわ、私がこの国の歴史についてレクチャーしてあげる。 でもその前に、サリュエル様への取次ぎを済ませちゃいませよ！」

フォルナはデイドの腕を掴むと、ぐいぐいと突き進み内郭門も抜けた。

王宮内に入り更に先へ進むとすると、二人は兵士に呼び止められた。

話を聞くと王宮の解放日と言えど解放されるエリアは決まってお  
り、二階以上は全て立ち入り禁止だというのだ。

(どづしよづ。　これじゃサリュに会えない)

しかたなくデイドは事情を説明し、サリュエルに会いたい旨を伝えた。

すると、兵士は半信半疑ながらも彼女の言葉を上階へと取り次いでくれた。

それからしばらく経った頃、別の兵士がやってきた。

「すまない、待たせたね。　話は伝えたんだが、サリュエル様は今直ぐには降りてこれないらしい。　正午の鐘が鳴ったら中庭の噴水前で待っていて欲しいとのことだ」

「ありがとうございます」

デイドが愛らしくお辞儀をする中、隣ではフォルナが手を合わせ目を輝かせていた。

「これで本当にサリュエル様にお会いできるのね！　あゝ今すぐ正午にならないかしら！」

「フォルナ、時間は常に一定間隔でしか進まないのよ」

「わ、解ってるわよ！ 言葉の綾じゃない。デイドちゃんって変なところで真面目なんだから。ほら、取次ぎも済ませたし時間まで歴史の勉強をしに行くわよ！」

恥ずかしさをごまかすように、ぐいっと腕を掴むとフォルナはずんずん次の場所へと向かっていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4534y/>

---

GATE KEEPER

2012年1月2日00時50分発行